

# 飛行機の下の村

宮本百合子

青空文庫



旧佐倉街道を横に切ると習志野に連る一帯の大雑木林だ。赤土の開墾道を多勢の男連が出てシャベルやスコップで道路工事をやつている。×村から野菜を○○へ運び出すのに、道はここ一つだ。それを軍馬が壊すので、村民がしなければならない。爺さんまで出て腰の煙草入を振り振りモツコの片棒担いでいる。

附近に陸軍飛行機学校、機関銃隊、騎兵連隊、重砲隊などがある。開墾部落はその間に散在しているのだ。

南京豆と胡麻畑の奥に、小さい藁葺屋根の家が見えた。われわれ一行三人が、前庭に入つて行くと、

「よう！」

低い窓からこつちを見て勢のいい声をかけたのは主人××君だ。土間で手拭をかぶつて働いてたお神さんが、

「さ、おあがりな」

春から懇意の△△君が作家同盟から今度文学新聞が発行されること、そこへ記事や写真を載せたくてやつて来たことなどを話した。

×

洗いざらしだが、さっぱりした半股引に袖なしの××君は、色のいい茄子の漬物をドッサリ盛った小鉢へ向つて筵の上へ胡坐あぐらを搔き、凝つときいている。やがて静かな、明晰な口調で、

「どうだ、今夜居られるかね？」

と訊いた。

「僕らはいいです」

「それじや結構だ。みんな集めるのは夜の方がいい」

××君は元からプロレタリア文化運動の基礎は工場・農村の中へ置かれなければならぬいと実践から主張して來たんだ。

この部落十七軒が団結して独占地主××と闘争をはじめたのは昨日今日のことではない。旧労農党時代からだ。近隣の三部落も全農支部を組織して勇敢に闘争している。中でもこの部落は四・一六と二・一六とに犠牲者を出した。組合員は地主との闘争の焦点をハツキリ土地問題において勇敢にやっているのだ。部落の小作料はもう五年間も未納だ。

×

この一見何の奇もない四十男の××君が、このためには口で云えない努力をつづけて来ているのだ。

途中で見て来た道普請のことが出た。

「組合員は反対なんだ。強制賦役反対、弁当代を出せると云つていてるんです」

やがて、美味いウドンの昼飯をすませ、山芋掘の鍬をかついだ××君を先頭に家を出た。栗鼠くりすずが風の如く杉の梢を、枝から枝へ飛び移つて行く。栗の青いイガが草の中へ落ちてゐる×××老人の家で夜まで遊ぼうというわけだ。四・一六の時、×××老人は婆さまもろとも引っぱられたが、六十日ブタ箱にたたきこまれている間一言も物を云わなかつたといふんで、部落の一つ話になつてゐる。

「看守が来ると、おーい、年とつて目が見えんからお前見とくろつちや、毎日虱とつとつた」

×××老人は、皺だらけの顔で言葉少にその時のこと話を話し、愉快そうにハツハツと笑つた。

まわりの手入れの行届いた畑には、薯、菜、大根、黍きび、陸稻なんかが育つてゐる。部落組合員は、経済恐慌と闘争の激化につれて「闘いのための生産へ!」というスローガンで市

場へ売り出す白菜や南京豆の代りに、こういうものを作りはじめたんだ。

×

天井の棟から、五分芯ランプが下つてゐる。左翼劇場のビラの下に壁へ濃い陰影をおとしながらギツシリつめかけて坐つてゐるのは、婦人部の連中だ。二十すぎから四十前後の組合員のお神さんたちで、子供づれもある。隅の布団にくるまつてもう二人の子がスヤスヤ眠つてゐる。

××君の非常にうまい司会で、ソヴェト同盟の農村と婦人の話がすんだところだ。四・一六の前から、救援運動を通じて実践的に組織されて來た婦人部だし、みんな年配で経験は深いし、ソヴェト同盟農村託児所の話、産院、休みの家、勤労婦人の種々な権利についての話は、實際の興味をひいた。

ソヴェト同盟の話は、われわれの今日の情勢とひとりでに結びつき、戦争の話も出た。  
「市太郎やーい」の活動写真が村へ來た話をしてくれた。

「ただで見せるちゅうからやらズばなんめえてやつたら、七錢とられただよ」  
「しようねえな。支那とこんなことんなつてはあ早速豆板（肥料）が上つただよ。こないだ××さんが買つた時は一円二銭だつたのがは、一円二十二銭しるだアよ」

「おーさ。石油も上りはじめただよ」

「こいでまた繭の値はがた落ちだし、どつち向いてもいいことはねえ」  
が、愚痴じやない。そう云つた五十ばかりのお神さん自身活々と輝いた眼をしてランプ  
の下で笑つてゐし、みんなも「おーさ！」と答えつつ、悄氣ているどころか！ 段々本気  
に子安講のことを討論しはじめた。部落で一戸ある裏切者を中心に四五人がかたまつてそ  
の講をたて飲んだり食つたりしているんだそうだ。

「——みんな、産が安かんべと思つて、講さ入つてるのよ」

「講さ入んねえばつて生めるよ。入つていてくれたつて赤ん坊は勝手に出て来るもんだ」  
どつか後の方に坐つてお神さんが云つた。

「でも……講からはずれた××さんは、赤ん坊の頭だけ出て、あとえらい難産したアだと  
よ」

「そら、お前四日も食わなかつた揚句だもの！ 体に力がないところさ、どうして安々生  
れべ！ 子安講さ入つてもわれわれが見えるようにはならねえよ」

「おーさ！」

「子安講をやるんだら、いつそ組合總体が入つてしまふべ！ あんな裏切もんの指図でしる

こたねえだ

「おーさ！」

月の光がガラス戸の外一面に流れ、宵の口は薄ら寒かつたが、今はみんな熱心に喋るもんで水が飲みたいぐらいになつて來た。××さんが提議して大きな西瓜が切られた。かれこれもう一時過ぎてているのに西瓜の盆をかこんで活潑に討論し、陽気に笑い「さ、そろそろ帰るべ」とは云いながら誰ひとりランプの下から動かない。婦人部維持費五銭積立の件、××さん出産祝の件、組合内に購買組合を組織する件、日頃の団結の強さと未来の勝利への確信が何とも云えない熱となつてこの屋根の下に燃え輝いている。

×

翌朝は日が出ると間なし起床だ。

いい天気で、朝靄が緩やかな畠の斜面や雜木林の彼方にかかっている。朝日のさす部落の梨の木の下で、昨夜集まつた連中その他がわざわざ『文学新聞』のためだからといつて集まり、写真をとつた。

〔一九三一年十月〕





## 青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第十七巻」新日本出版社

1981（昭和56）年3月20日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第4刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集」河出書房（巻数不明）

初出：「文学新聞」日本プロレタリア作家同盟機関紙

1931（昭和6）年10月10日創刊号

入力：柴田卓治

校正：磐余彦

2003年10月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) に作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

# 飛行機の下の村

## 宮本百合子

2020年 7月17日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>